



# 原子化する社会

内田 樹

*uchida tatsuru*

転職をヒステリックに繰り返すが、ある日、理想の職場に出合う確率は、かなり低い。だが、転職を繰り返す人への情報提供やマッチングのコミッションを受け取る商売をしている人は、高い確率で利益を手にすることができる。相当数の若者たちが不幸になることで収益を確保している企業が存在しているという事は、否定しがたい事実である。

日雇い派遣業やネットカフェや消費者金融のような、いわゆる「貧困ビジネス」も同様である。財政状態が劣悪で、雇用形態が不安定である人々の数が増えれば増えるほど、これらのビジネスは利益を上げる。日本人の一部が困窮化することから現に利益を上げている人々は、(個人的にはどれほど善意であっても)「日本人の、できるだけ多くが困窮化しますように」と祈るのを止めることができないであろう。

私は、この全体の趨勢を「国民の原子化」と呼ぶことができるのではないかと思う。「砂粒化」と言ってもよい。一人ひとりの人間の「自我」が極端に縮減して、ほとんど鉱物の結晶のように、ソリッドで透明で均質的になった状態。それを仮に「原子化」と呼ぶ。デカルト的な「コギト」の極限化したものと言うこともできる。

「原子としての私」が「世界」と対峙している。「世界」というカオス的で、偶然的で、

若者の転職志向が歯止めなく進行している。今年(二〇〇七年)の四月に入社した新入社員の転職サイトへの登録数は、前年度比の二倍という記事が日本経済新聞に出ていた。四月に入社して半年も経たないうちに、すでに相当数の人々が条件のよい転職先を探し始めているのである。転職のためのセミナーも頻りに開かれており、そこでは、すでに転職数

回というような経験者が担当者に、「御社は人を大切にする会社なんですか？」と殺氣立った表情で詰め寄っている風景などが見られるようである。

「これはいったいどういうことなんでしょう」と、ときどき訊かれる。

とりあえず一つわかるのは「それで儲かっている人がいる」ということである。

星雲的なくちやぐちやしたものに呑み込まれながら、どのようにして「結晶」の純粋性、透明性、唯一無二性を保持するか。たぶん、現代の若者の多くは自我問題をどのように定式化している。「自」実現」とか「自」決定」とか「自分探し」などという言葉は、この定式の言い換えである。一見するとシンプルで整合的な定式だが、ここには重大な欠陥がある。それは、彼らが「世界」と呼んでいる巨大で非人称的なシステム（に見えるもの）は、実は、彼が彼の同類である「原子」たちといっしょに構築している、「ダメになった自我」にすぎないということである。

貧困ビジネスにしても、「できるだけ多くの日本人が貧窮化すること」は望んでいるが、日本人全員が貧民化してしまうと、市場そのものが消失してしまうので、「とりわけ不運な日本人だけが選択的に貧窮化すること」を祈っているはずである。

つまり、「原子化」しているように見える社会というのは、実は「ワキの甘い原子」を選別して、一部の「狡猾な原子」にリソースを集中させるシステムだということである。

全体として「原子化」しているのではなく、（平たく言うと）「脳天気な原子」を収奪するために活発なセレクションが行われているシステムだ、ということである。そして、このシステムで最初に「収奪される原子」とし

て選択されるのが、おのれの純粋性、透明性、唯一無二性にこだわる「原子」たちだということである。それは、彼らには「うっかりメディアのアオリに乗って原子化している」と、すぐに食い物にされるぞ」という貴重な忠告をしてくれる「先達原子」や「身内原子」がないからである。

だいたい「先達」とか「身内」というようなものが「原子」にある、ということ自体が「原子論」的には不条理なのであるが、さきほどから言っているように、現代日本は人々が「原子化しているように見える」社会ではあるけれど、実際には「原子化した人々」がもっぱら収奪され、原子化しない人々（先達とか身内とかと、緊密なネットワークを有している人々）ばかりがリソースの優先的分配に与る、局所的にしか原子化されていないシステムなのである。

この原理はいまも昔も変わらない。単独で生きようとする個体は、集団を形成してリスクヘッジ（危険回避）してくれる仲間をもっている個体よりも生き延びる確率が低い。それはいまに始まった話ではない。

もちろん、例外的に強く幸運な個体であれば、リスクヘッジなしで、個人で生きてゆることができる。だが、ほとんどの人はそうではない。「個人が原子化した社会」では、例外的に強くも幸運でもない人々は、ひとたび

集団を離れて原子化すると、生涯を収奪され続けるように構造化されている。だから、「収奪する側」にいる「強者」たちは、「収奪される人たち」（「食い物」です、ね、要するに）が安定的に供給されるように、「原子化すると楽しいですよ」ということをためにアナウンスしているのである。集団を作って乏しい資源を分かち合い、危険を回避することに配慮する人々が増えると、「強者」たちにとっては「食い物」が減るからである。

「原子化せよ」というイデオロギーは一九八〇年代から新自由主義的な国策とあいまって日本の子どもたちに吹き込まれた。それが二〇〇〇年代に入って、「学校からの逃走（不登校、学力低下）」「職場からの逃走（ニート、フリーター、転職離職志向）」「家庭からの逃走（晩婚化・未婚化）」「親族義務からの逃走（少子化・家庭内弱者遺棄）」といった、一連の「集団を形成することの拒否」として同時多発的に現象化してきた。私はそのように了解している。

一人で生きることが自由で気楽である。自己決定も自己実現も達成感をもたらす。しかし、それらの「快」は、「強者の食い物にされる」という「不快」とはトレードオフできないだろうと私は考えている。

（うちだ たつる・神戸女学院大学文学部教授  
著書に『下流志向』講談社、二〇〇七年